

第24回
外国人による
日本語スピーチコンテスト

2015年1月31日（土）午後1：00～4：30

ところ／県民文化センター小ホール

主催／公益財団法人茨城県国際交流協会

共催／茨城県

*茨城県知事賞

ナーヘド アルメリ (シリア出身)

「日本詩から見えてきた季節観と生命観」

私は日本に留学してきて、日本人が花、虫、魚の名前を色々覚えていることに驚きました。日本人の友達に、シリアの食べ物や気候を聞かれて、喜んで一生懸命説明していたが、困ったのは、どんな魚を食べるのか、どんな花が咲くのかという質問に対して、「魚は魚で、花は花でしょう」と、質問の意図がわからないままに答えるしかなかったことです。

私の国シリアは、地中海に面していて、海の生物の種類は多くないため、殆どの魚は単に“魚”と呼ばれています。名前がついているのはサーモン・鯛くらいでしょう。他は全部魚と言っています。日本では鯛、鯉、鮭など、全部の魚に名前がついているばかりか、鯛に至っては大きくなるにつれて4回も名前が変わるそうです。魚ほどではないが、シリアでは花と虫の名前もそれほど重要ではありません。名前はあるのですが、日常生活では使われないし、教科書にもあまり出て来ません。日本に着いたばかりの頃は、「昨日の魚美味しかったよ」というと、「何の魚？」と必ず聞かれました。「何の魚ですって？なんで名前がそんなに重要なの？」と独り言で思っていました。魚だけではなく、この様なエピソードは何回もありました。そしてこの日本で暮らすのには、花や魚や虫のすべての名前を覚えなくてはならないのかなあと面倒に思えるのでした。

私はもともと「アラブ詩」が大好きで、小さい頃から様々な作品を読んできました。そこで、2011年9月に筑波大に留学してから、シリアと遠く離れた日本にはどのような詩の作品があるのか興味を持ち、読み始めました。

アラブ詩のテーマは恋愛、人生論、思想や政治などで、そこには絶対登場しなかった花、虫、魚の名前が日本詩にはたびたび出てきて、特に虫も季語であることをとても不思議に思いました。例えば、

とゞまればあたりにふゆる蜻蛉かな (中村汀女)

閑さや岩にしみ入る蟬の声 (松尾芭蕉)

「トンボですって？あのうるさいセミですって？！！

あんな迷惑な虫が威張って俳句にのさばるなんてありえな～～～い！」

トンボとかセミといった類の虫は存在自体が迷惑で、アラブ詩には絶対に出て来ません。

ここでアラブ詩の一節を紹介したいと思います。

تعلمي لم بما جاهلة كنت إن مالك يابنة الخيل سألت هلا

詩人は自己をとて誇らしく思い、好きな女性に話しかけている。「知らなければ馬に聞きなさいよ。私はどんな人か教えてくれるでしょう。」といった意味でアラブ人なら誰でも知っている、1500年前の詩です。

虫と並ぶ花や魚の季語を友達に訊くと、この花なら春、この魚は冬、こういうサイズでこういう味、こうやって食べるんだとか教えてくれました。どうしてこんなに詳しいのかうらやましくなった私は、こういうのはどこでどうやって覚えるのかと調べてみました。その結果、学校でも少し教えているようだが、日本人はそれらを教わっていると意識せずに、日常生活の一部にしている事、四季に恵まれているために季節観を大事にしていることが分って来たのでした。また、日本詩をきっかけに、人間以外の世界にも視点が広がって来て、世界のあり方や眼差しについて、改めて思いをはせました。

残念ながら私達は現代社会において、急激な工業の発達で人工化した生活にうずもれ、自然や文化との接触を失い、自分達は様々な生命体の一つであるという自覚さえも失っていますが、本来身に付けてきたはずの生命の感覚を取り戻すことが大事だと思います。「日本詩」を読んだことで日本の季節観・自然観を身近に思い、初めは写生的な描写としか捉えられなかった日本の詩を生命の感覚として捉えられるようになり、とてもうれしく思っております。御清聴ありがとうございました。